

平成31年度

劇場・音楽堂等機能強化推進事業

(劇場・音楽堂等機能強化総合支援事業)

自己点検報告書

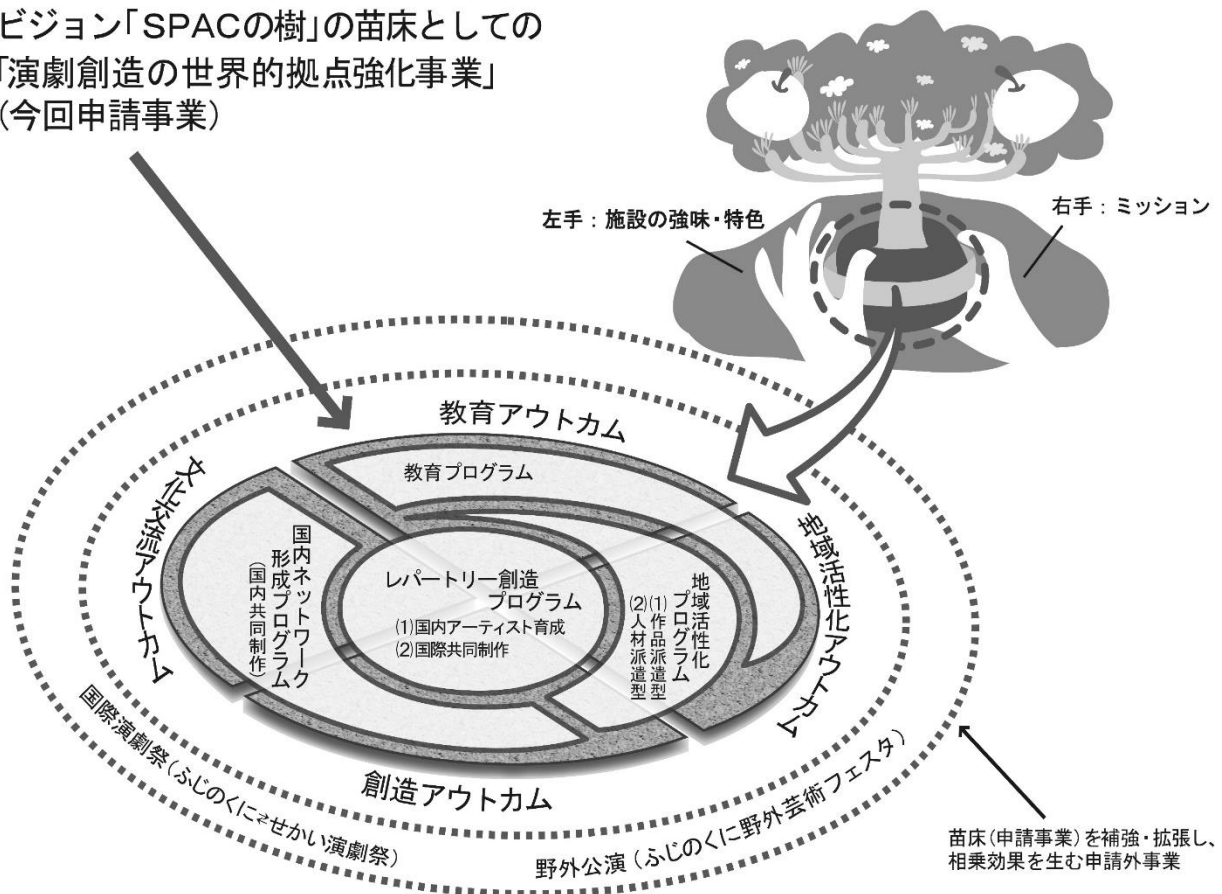
団 体 名	公益財団法人静岡県舞台芸術センター	
施 設 名	静岡県舞台芸術センター (SPAC)	
助 成 対 象 活 動 名	演劇創造の世界的拠点強化事業	
助 成 期 間	5	(年間)
内 定 額	57,702	(千円)

# 1. 事業概要

## (1) 事業計画の概要

全体図（概念図）

ビジョン「SPACの樹」の苗床としての  
「演劇創造の世界的拠点強化事業」  
(今回申請事業)



この全体図（概念図）は、様式 1-1-2 [劇場・音楽堂等のビジョン] を前提としており、今回申請する「演劇創造の世界的拠点強化事業」が実施される5年間を、上記「ビジョン」で示した「SPACの樹」(=15年後のSPACのイメージ)の「苗床」と位置づけている。

その「苗床」の構造としての「本事業のアウトカム」は、【創造アウトカム】【文化交流アウトカム】【教育アウトカム】【地域活性化アウトカム】の4つで構成されており、各アウトカムは、それぞれ様式 1-1-1 で示した [ミッションの4細目] に対応するものである。(各アウトカムの内容については様式 1-2-4- (2) 参照)

また、各アウトカムを発揮する個別事業(様式 1-3-①個表参照)は、「レパトリー創造プログラム」「国内ネットワーク形成プログラム」「教育プログラム」「地域活性化プログラム」に分類される。これらの各事業分類はそれぞれ複数のアウトカムを発揮するため、本図では、各事業分類をそれぞれが発揮する複数のアウトカムをまたぐ形で配置している。

なお、申請外事業の国際演劇祭(ふじのくにせいかい演劇祭)および野外公演(ふじのくに野外芸術フェスタ)も、今回申請事業と連動し相乗効果を発揮するため、それぞれ、今回の申請における4アウトカムの外縁の位置に配置した。

(2) 平成31年度実施事業一覧

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場			
1	レパトリー創造プログラム (1)国内の優れたアーティストとの作品創造	平成31年12月～ 令和2年2月	『RITA&RICO(リタとリコ)～「セチュアンの善人」より～』演出:渡辺敬彦 『グリム童話～少女と悪魔と風車小屋～』演出:宮城聡 『メナム河の日本人』※演出:今井朋彦 出演:SPAC (※新型コロナウイルスの影響により令和2年2月28日～3月11日の公演を中止した。)	目標値	11,808
		静岡芸術劇場		実績値	7,624
2	レパトリー創造プログラム (2)国際共同制作	平成31年6月・11月	『イナバとナバホの白兔』演出:宮城聡 『パール・ギュントたち～わくらばの夢～』演出:ユディ・タジュディン 出演:SPAC	目標値	3,940
		静岡芸術劇場		実績値	3,005
3	国内ネットワーク形成プログラム(国内共同制作)愛知県芸術劇場・SPAC共同企画『寿歌』	平成31年10月	『寿歌』演出:宮城聡、出演:SPAC	目標値	3,828
		静岡芸術劇場		実績値	2,838
4	教育プログラム(1) SPAC-ENFANTS-PLUS	平成31年8月	「メルラン・ニヤカムによる創作ワークショップ」 振付・演出:メルラン・ニヤカム	目標値	80
		舞台芸術公園 稽古場棟「BOXシアター」		実績値	123
5	教育プログラム(2) SPACシアタースクール	平成31年7月・8月	『オフェリアと影の一座』 構成・演出:中野真希	目標値	参加者:40 入場者:500
		静岡芸術劇場		実績値	参加者:41 入場者:666
6	教育プログラム(3) 中学校演劇支援事業～SPAC演劇奇跡のレッスン～	平成31年6月～ 令和2年2月	「SPACプレゼンツ 演劇出前塾」 「SPAC1日演劇学校」 「バックステージツアー」 (※新型コロナウイルスの影響により令和2年3月の事業を中止した。)	目標値	445
		静岡県内高校 他		実績値	99
7	教育プログラム(4) SPACこども大会		※中止(※新型コロナウイルスの影響により令和2年度へ延期した。)	目標値	参加者:30組 入場者:245
				実績値	応募者数: 29組60名
8	地域活性化プログラム(1) 作品派遣型アウトリーチ事業	平成31年4月～ 令和2年2月	「SPAC出張朗読公演・出張劇場」 「SPACおはなし劇場」 出演:SPAC (※新型コロナウイルスの影響により令和2年3月の事業を中止した。)	目標値	2,780
		各市町幼稚園 他		実績値	3,487

9	地域活性化プログラム(2) 人材派遣型アウトリーチ事業①	平成31年4月～ 令和2年2月	「放課後えんげき教室」 「リーディング・カフェ」 「出張講座・ワークショップ・人材派遣」 (※新型コロナウイルスの影響により 令和2年3月の事業を中止した。)	目標値	1,975
		各市町文化施設 他		実績値	2,067
10	地域活性化プログラム(2) 人材派遣型アウトリーチ事業②	平成31年6月～11 月	「みんなで育てよう！ダンスの種プロジェクト」	目標値	600
		各市町小学校		実績値	784
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	

## 2. 自己評価

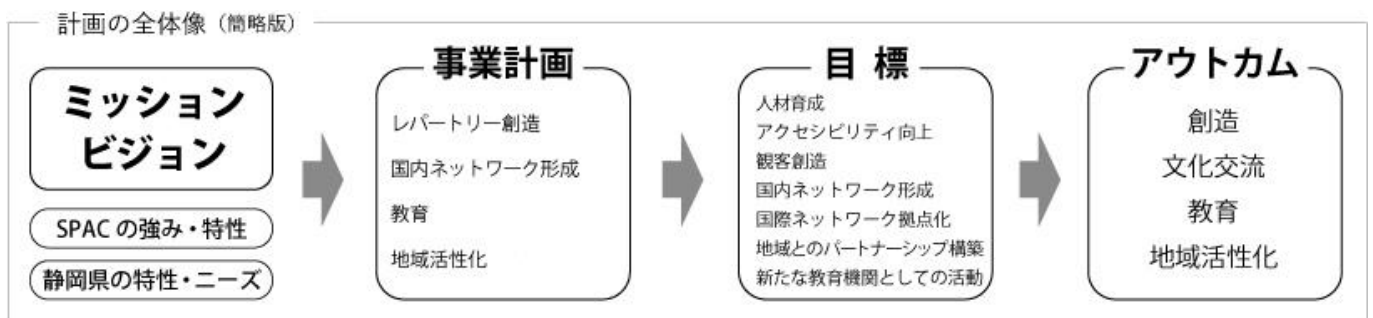
### (1) 妥当性

#### 自己評価

事業計画に必要な構成要素が有機的に関連し、当初の予定通りに事業が進められているか。

「演劇創造の世界的拠点強化事業」は、SPAC が日本で唯一の「専用劇場を持った公立劇団」であるという独自性と、国内外で高い評価を得てきた 20 年以上にわたる演劇創造活動の蓄積を生かした事業である。「世界をリードする創造活動によって、日本文化の国際的プレゼンスを高める」というミッションを掲げ、世界中から人々が集う「演劇の都＝SHIZUOKA」の実現、というビジョンに向け事業を展開する。

ミッション、ビジョン、事業、目標、アウトカムが下図「計画の全体像(簡略版)」のとおりに関連しており、10 の事業に、7 つの目標を設定することで、4 つのアウトカム:「世界レベルの演劇レパトリーの【創造】」「アーティスト同士のネットワークによる【文化交流】」「子どもたちの創造性・人間性を高める【教育】」「地域のブランド力を高める【地域活性化】」の発現を図る。

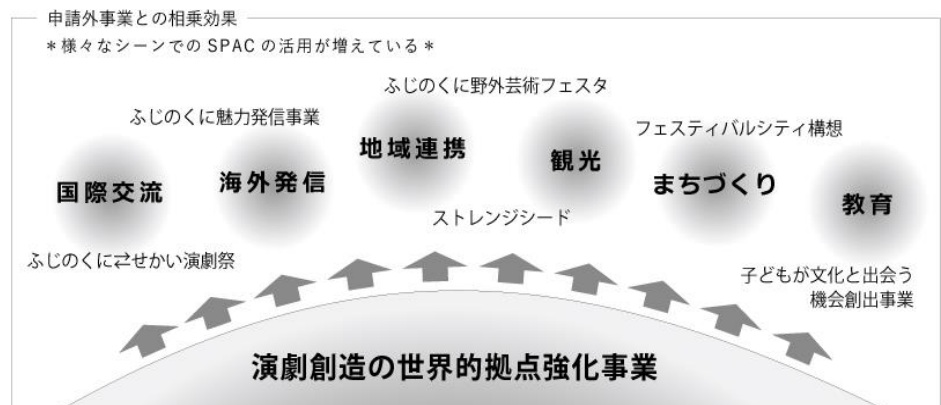


平成 31 年度事業は、ふたつの大きな要因による事業変更が生じた。ひとつ目に、台風 19 号の影響により、事業3『寿歌』公演が 1 回中止となった。ふたつ目に、新型コロナウイルスの影響により、次の事業が中止となった。事業1『メナム河の日本人』の 3 月公演、事業6「演劇出前塾」「バックステージツアー」の 3 月実施分、「1 日演劇学校」、事業7「SPAC こども大会」、事業8・9のアウトリーチ 3 月実施分が中止となった。(「SPAC こども大会」は令和2年度への延期。)

助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。

平成 31 年度は、フランス国立ケ・ブランリー美術館で『イナバとナバホの白兔』を新演出上演。また、日本博「Japan2019」公式企画としてニューヨークにて『アンティゴネ』を上演し、高い評価を得ることができた。このことは、日本文化の国際的プレゼンスをさらに高めたと言えるだろう。こうした SPAC の舞台作品を、静岡県内の中高生は学校の授業の一環として無料で観劇でき、平成31年度は1万人以上が観劇をした。近年ますます求められる子どもたちの創造性や異文化理解を育む教育機関としての役割も果たしている。また、SPACの俳優やスタッフが劇場を飛び出して行うアウトリーチ活動は、新型コロナウイルスによる影響で実施回数は減ったが、いずれも目標値を超える実績を残しており、地域からの SPAC への期待は高まりを見せている。

さらに、本事業によって生まれた資源(作品・人材・ネットワーク)は、右図のとおり申請外事業への広がりへと結びつき、国際交流、海外発信、地域連携、観光、まちづくり、教育におけるさらなる効果をもたらしており、文化的、社会的、経済的意義が継続して認められる。



## (2) 有効性

### 自己評価

目標が達成し、アウトカムの発現は可能か。

#### 【視点1】

##### ◇アウトカム及び目標・指標設定の考え方

【創造】【文化交流】【教育】【地域活性化】の4つのアウトカムの発現に向け、1)人材育成[1-1 アーティスト育成、1-2 スタッフ育成、1-3 サポーター育成]・2)アクセシビリティ向上・3)観客創造・4)国内ネットワーク形成・5)国際ネットワーク拠点化・6)地域とのパートナーシップ構築・7)新たな教育機関としての活動、という7つの目標を設定している。各目標には関連するアウトカムが複合的に紐づけられており、各目標の達成が、すなわちアウトカムの発現につながる。(※アウトカムと目標の対応関係は本事業「平成31年度助成金交付申請書、様式4-2、(2)事業計画の概要」参照。) また、各目標は一部を除き複数の事業に割当てられており、事業と目標を一对一にしないことで、事業間で目標達成を補完し合い、実施年度ごとの確実なアウトカム発現を図っている。(今回は事業7が新型コロナウイルス感染拡大により令和2年度へ延期となったが、割当てられていた目標は他事業により達成した。)

指標については、本年度交付申請時点ではタスクリスト的な20指標を各目標に割振る形式を予定していたが、中間審査でのフィードバックを受け、7目標に対し総合的な指標をそれぞれ1つずつ設定する形式に変更した。(変更後の内容は本事業「令和2年度助成金交付要望書、様式1-1、2事業計画の概要(2)アウトカム及び目標・指標、③指標」に同じ。)

##### ◇指標設定の根拠、指標の測定方法

各目標に設定された指標は全て定性的指標であり、全制作スタッフの意見を反映させた、目標達成のためのオペレーションレベルのアクションプランとなっている。各指標は「自己評価ユニット」によって、事業担当者により事業ごとの指標内容の実現度合＝目標の達成状況を測る。自己評価ユニットでは、目標1)-1、1)-2、1)-3に対応する指標については4段階の段階評価を、目標2～7に対応する指標についてはそれぞれ10項目のチェックリスト評価を行う。4段階の段階評価はそのままA～Dの判定となり、10項目のチェックリスト評価は8項目以上の実現でA、5項目以上でB、3項目以上でC、2項目以下でD判定となる。(結果は下表参照。) 加えて、アンケート集計結果も定性的な判定基準となる。以上の定性的評価と、定量的指標としての数値目標の達成状況をあわせて各事業の成果を測り、アウトカムのインパクトおよび阻害要因を可視化し、当劇場・劇団における機能強化の進捗状況を確認するものとしている。(数値目標の結果については本報告書「2. 自己評価(3)効率性」において示すものとする。)

・表: 自己評価ユニット判定結果一覧

(※ダッシュは、同判定においてダッシュ無しに劣る)

事業番号・名称	目標1-1	目標1-2	目標1-3	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7
1 レパトリー創造プログラム(1) 国内の優れたアーティストとの作品創造	A'	B	A	A	A	-	-	A	-
2 レパトリー創造プログラム(2) 国際共同制作	B	B'	A'	A	B	-	A	C	-
3 国内ネットワーク形成プログラム(国内共同制作)	B	B	-	A	B	A'	-	-	-
4 教育プログラム(1) SPAC-ENFANTS-PLUS	A	-	-	B	-	-	-	-	A
5 教育プログラム(2) SPAC シアタースクール	-	B	-	B	-	-	-	-	B
6 教育プログラム(3) 中学高校演劇支援事業	-	-	-	-	-	-	-	B	B
7 教育プログラム(4) SPAC こども大会	新型コロナウイルス感染拡大により令和2年度へ延期								
8 地域活性化プログラム(1) 作品派遣型アウトリーチ事業	A	-	A	B	-	-	-	A	B
9 地域活性化プログラム(2) 人材派遣型アウトリーチ事業①	-	-	B	B	-	-	-	B	B
10 地域活性化プログラム(2) 人材派遣型アウトリーチ事業②	-	-	A	B	-	-	-	B	A

#### 【視点2】

##### ◇要因の解析結果、共有状況、解決手段等

自己評価ユニットによる定性的な効果測定では、各目標に対する事業の相互補完がうまく働き、上掲表の通り各目標について概ね複数の事業でのAまたはA'判定を実現したが、目標1)-2スタッフ育成が、全ての割当事業でB判定にとどまった。これは、【D段階:主体的に事業を企画・運営、C段階:新たな技能を獲得、B段階:新たな課題を発見・共有し課題解決に向けた対策を実施】まではクリアしたが、【A段階:新たに獲得した技能や課題の解決に向けた対策について、SPAC内で蓄積・継承するための方策を講じた】の未達によるものである。解析結果としては、「セクション内や演目の座組内での意見交換は活発で各スタッフやセクション内では記憶・記録されているが、組織全体として蓄積・継承されるには至っていない。事業終了後を見据えた蓄積・継承の仕組みや、プロジェクトの振り返り、事後検証のための時間や仕組みがない。」というもので、仕組みづくりでの解決が喫緊のタスクとなっている。また、今年度は、目標4)および、目標5)について、目標4は1事業1演目、目標5は1事業2演目にしか設定できず、今年度は幸い当該事業での目標達成ができたが、今後は事業全体における各目標の割当てバランスについての検討が必要である。なお、定性的な効果測定としてのアンケート結果における公演の満足度については、5段階評価での上位2つ(とても良い、良い)の割合が、事業1の3演目平均値が90.8%、事業2の2演目平均値が89.15%、事業3が86.2%、事業5が93.0%と、高い満足度を得た。事業8～10のアウトリーチ系各事業についても、概ね90%前後の満足度を維持している。

### (3) 効率性

#### 自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んでいるか。

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んでいるか。

#### ◇事業期間

すべて適切に進行した。

#### ◇事業費

交付申請書での支出予算に対し、実績報告書での支出決算が以下の通りである。概ね予算通り執行した。

なお、事業6については演劇出前塾の実施回数が当初15回を予定していたが8回の実施に留まった。

1	レパトリー創造プログラム(1)国内の優れたアーティストとの作品創造	109%
2	レパトリー創造プログラム(2)国際共同制作	108%
3	国内ネットワーク形成プログラム(国内共同制作)	88%
4	教育プログラム(1)SPAC-ENFANTS-PLUS	92%
5	教育プログラム(2) SPACシアタースクール	68%
6	教育プログラム(3) 中学高校演劇支援事業	59%
7	教育プログラム(4) SPAC子ども大会	88%
8	地域活性化プログラム(1)作品派遣型アウトリーチ事業	120%
9	地域活性化プログラム(2)人材派遣型アウトリーチ事業①	81%
10	地域活性化プログラム(2)人材派遣型アウトリーチ事業②	87%

#### ◇参加者・入場者数

	入場者・参加者数	要望書	実績	達成率
1	レパトリー創造プログラム(1)国内の優れたアーティストとの作品創造	11,808	7,624	65%
2	レパトリー創造プログラム(2)国際共同制作	3,940	3,005	76%
3	国内ネットワーク形成プログラム(国内共同制作)	3,828	2,838	74%
4	教育プログラム(1)SPAC-ENFANTS-PLUS	80	123	154%
5	教育プログラム(2) SPACシアタースクール 参加者数	40	41	103%
	入場者数	500	666	133%
6	教育プログラム(3) 中学高校演劇支援事業	445	99	22%
7	教育プログラム(4) SPAC子ども大会 参加者組数	30	29	97%
	入場者数	245	中止	中止
8	地域活性化プログラム(1)作品派遣型アウトリーチ事業	2,780	3,487	125%
9	地域活性化プログラム(2)人材派遣型アウトリーチ事業①	1,975	2,067	105%
10	地域活性化プログラム(2)人材派遣型アウトリーチ事業②	600	784	131%

事業1は『メナム河の日本人』公演が、新型コロナウイルスの影響により一般公演7回予定のところ4回、中高生鑑賞事業12回予定のところ4回になったことが大きい。事業2の『パール・ギュントたち』は多彩なアーティストの参加により観客の新規開拓を狙ったが、多言語での上演形態が観劇のハードルとなり集客に苦戦した。事業3の『寿歌』は台風19号の影響により一般公演が1回中止となり、また前後の公演での払い戻し対応を行った。

事業6の3事業のうち演劇出前塾が15回開催予定のところ8回に留まった。これは通常学校からの申込が夏休み・春休みが中心であるのに対し、春休みの実施が困難だったことによる。「1日演劇学校」も新型コロナウイルス感染拡大の影響により事業中止した。「バックステージツアー」が目標値に対して大きく下回った要因は、新規の演劇部とのネットワークがまだ希薄だということにある。事業7は新型コロナウイルスの影響により令和2年度への延期となった。

## (4) 創造性

### 自己評価

事業計画の内容が、独創性、新規性、先導性に優れている（と認められる）か。

#### 【視点1】

◇独創性、新規性、先導性等を発揮するための資源

SPACは日本で唯一の「専用の劇場を持った公立劇団」として、パフォーミングアーツ専用設計された静岡芸術劇場と舞台芸術公園を拠点に、人事権と予算執行権を持つ芸術総監督のもとで専属の俳優やスタッフが活動する独自の体制を敷いている。静岡芸術劇場には衣装・舞台美術の創作のための工房、演劇に特化した音響・照明設備があり、専属スタッフが常駐し創作活動を続けている。さらに制作スタッフ自らが票券システムの管理運用や、多くの広報物についても自らデザイン制作を行っている。

芸術総監督を務める宮城聰の創造活動への評価は国内外で確立されており、平成29年度（第68回）芸術選奨文部科学大臣賞（演劇部門）受賞、平成31年4月にはフランス芸術文化勲章シュヴァリエを受章している。

#### 【視点2】

◇各事業の独創性、新規性、先導性

・レパトリー創造プログラム [事業1 (国内の優れたアーティストとの作品創造)、事業2 (国際共同制作)]

国内外の新進気鋭の演出家・アーティストとともに世界レベルの作品を創造・上演。平成31年度は5作品の新作を製作し初演を成功させた。

事業1 (国内の優れたアーティストとの作品創造)については、『セチュアンの善人』は、SPAC専属俳優・渡辺敬彦の演出家としてのSPAC本公演デビューとなったほか、SPAC創作・技術部若手スタッフを舞台監督やプランナーとして積極的に起用し、スタッフ全体のスキルの底上げを図った。『グリム童話』は、フランスの劇作家・演出家オリヴィエ・ピの戯曲を宮城聰が演出した作品の再々演で、今回は若手・中堅クラスの俳優の養成を図り、週替り4通りの配役での上演を成功させた。『メナム河の日本人』では、文学座の今井朋彦を演出に迎え、先行上演例の少ない遠藤周作の戯曲を上演した。若手俳優を主役に、ベテラン俳優で脇を固める配役で緻密な会話劇を成立させ、この戯曲が繰り返し上演されるにふさわしい隠れた名作であることを示した。

事業2 (国際共同制作)については、『イナバとナバホの白兔』はフランス国立ケ・ブランリー美術館との共同制作による、平成28年にパリの同美術館内クロード・レヴィ=ストロース劇場にて初演した作品の新演出上演。平成31年6月のパリでの再演に先駆けて静岡芸術劇場での上演を行ない、演劇作品を海外と静岡の劇場をつなぐ架け橋とするSPACの継続的な取り組みにおける着実な成果となった。また、『ペール・ギュントたち ～わくらばの夢～』では、インドネシア屈指の芸術家集団「テアトル・ガラシ」との共同制作により、イプセンの『ペール・ギュント』を、インドネシア、日本、ベトナム、スリランカの様々な表現手法を持つアーティストとともに創作・初演し、舞台芸術分野におけるアジア圏での国際的なネットワーク構築を実現した。

・国内ネットワーク形成プログラム [事業3 (国内共同制作)]

事業3において平成29年度に愛知県芸術劇場と共同創作を行った『寿歌』の再演をおこなった。SPACのスタッフが愛知県芸術劇場より舞台技術を中心としたスタッフワークを引き継ぐことで、互いにノウハウを共有・継承し、連携を強化した。また、初演時よりツアーを想定して創作した作品の特性を生かし県内での出張公演を成功させたことで、今後他館からの招聘やツアー公演などにも応える準備を整えた。本作の上演や製作ノウハウを活用した、国内の劇場とのネットワーク形成についての可能性を高める成果となった。

・教育プログラム [事業4、5、6、7]

・地域活性化プログラム [事業8、9、10]

各企画の講師、コーディネーターをSPAC専属俳優・スタッフが務めることで、地域課題やニーズに沿った柔軟なプログラムを提案・展開している。

本年度については、事業4において、フランスを拠点に国際的な活動を展開する振付家・ダンサーのメルラン・ニヤカムを迎えて平成22年度より実施してきた「SPAC-ENFANTS」プロジェクトを新たなフェーズへと展開。世代をつなぐダンスプロジェクト「SPAC-ENFANTS-PLUS」として、オーディションによって選ばれた静岡県内の中高校生9名と、55歳以上のダンサー6名をカンパニーメンバーとし、10日間のワークショップを通して世代を超えたダンスの可能性を探った。



## 自己評価

事業の実施によって、当該劇場・音楽堂等の国内外での評価の向上につながっている（と認められる）か。

### 【視点1】

◇取組の国内外での評価向上状況

レパートリー創造プログラムのうち事業2『イナバとナバホの白兔』では、平成28年の初演時の成功を受けて、パリのケ・ブランリー美術館からSPACとの継続的な関係を希望され、今回（平成31年6月）に再び招聘を受けてパリでの再演を行なったという経緯があり、SPACのフランス国内での高い評価を証明している。また、事業2『パール・ギュントたち』では、ノルウェー政府が創設し世界の革新的な舞台芸術プロジェクトを表彰する「イブセン・スカラシップ」を受賞、2020年度中にインドネシア、ジャカルタでの再創作・上演が予定されている。

レパートリー創造プログラムのうち事業1『セチュアンの善人』『グリム童話』と国内ネットワーク形成プログラムの事業3『寿歌』では、中高生鑑賞事業の中で県内での出張公演を実施し、浜松や下田など遠方地域での公演が中日新聞や地元ケーブルテレビに取り上げられた。また、事業1『メナム河の日本人』では、タイのシントン・ラーピセートパン駐日大使に来場いただき、演出の今井朋彦や俳優たちとの懇談の様子が静岡新聞に掲載されるなど、地域における国際文化交流として県内外からの注目を集めた公演となった。

メディアでの注目度としては、平成31年度は国内全国紙・地方紙計71件の記事でSPACの活動や事業、関連事業が取り上げられた。2019年の回顧記事としても、日本経済新聞では記事冒頭に、朝日新聞では「地方発の国際的な活躍」の一つとして、SPACの活動が紹介されている。県内においても、静岡新聞ではアウトリーチ事業や人材養成事業を含め、前年度の23記事を大幅に上回る計41記事が掲載されており、SPACの幅広い活動に対する国内での注目度は一層高まっている。

なお、今年度SPACは、平成31年9月から10月にかけてニューヨーク・ワシントンを中心会場にスタートする日本博「Japan2019」の公式企画として招聘を受け、代表作『アンティゴネ』をニューヨークのパーク・アベニュー・アーモリーの「ドリル・ホール」にて、アヴィニョン法王庁中庭での上演時とほぼ同じ規模の水を張った舞台、1,000席の客席を設えて再演した。全11回の公演は全日程チケット完売、盛況を極め、現地のニューヨークタイムズ紙、ニューヨーク紙などで取り上げられ、タイム誌が発表する平成31年の公演ベスト10に選ばれた。国内でも日本経済新聞、毎日新聞、中日新聞、静岡新聞などで公演成功について大々的に報じられ、国外での評価として、本事業による国内での評価との相乗効果をもたらした。

### 【視点2】

◇ステークホルダーや地域のニーズへの対応

教育プログラムおよび地域活性化プログラム実施による成果の発展的展開として、年々ニーズの多様性が増している人材派遣／作品派遣によるアウトリーチ事業の規模拡大を図った。平成31年度は「静岡県子どもが文化と出会う機会創出事業」の一環として静岡県からの委託を受けて、学校訪問プロジェクト「ひらけ！パフォーミングアーツのとびら」を新たに実施した。この事業では、SPACの俳優・スタッフが各学校や放課後児童クラブなどを訪問し、計28件、1,986名の子ども達に演劇やダンスなどのパフォーミングアーツに触れる機会を提供し、県、県内政令市および一般市町とその教育委員会はもとより、地域の学校現場におけるSPACの認知度と県立劇団としての公益性に対する評価を高めた。また、地方自治体と公立劇場/劇団の連携についてのモデル的な事業形態として、全国に創造型公立劇場の存在意義をアピールすることができた。

## (5) 持続性

### 自己評価

事業計画を通じて組織活動が持続的に発展する（と認められる）か。

持続的なアウトカムの発現・定着が期待できるか。

#### ◇人材面

人員体制については、SPACの契約スタッフのうち半数近くが勤続年数9年以上であるが、平成31年度の新規採用では中途採用と新卒採用をともに行っており、新規スタッフの加入による組織の活性化を図っている。新規採用9名のうち7名が未経験・新卒であり、演劇業界を牽引すべき専門人材育成にも積極的に取り組んでいる。また、平成31年度の新たな試みとして制作部に臨時職員を配置し、これまで課題であった既存職員の業務効率化と負担軽減に向けた対策を講じることができた。

人材育成については、海外公演、他館との共催事業、人材交流によってOJTの効果を高めるとともに、今年度はアクセシビリティの向上や危機管理をテーマとする外部の研修会等へ参加するなど、マネジメント人材となる中堅以上のスタッフ育成を継続している。

#### ◇財務面

財源としては、主たる財源である静岡県一般財源補助金のほか、国庫補助金（本事業等）、他自治体からの補助金（静岡市）・受託金（静岡県、静岡市）、共催事業による負担金収入（独立行政法人国際交流基金）、民間助成金（一般財団法人地域創造、アンスティチュ・フランセ）の獲得、海外公演等による出演料収入など財源の多様化を維持し、財務規模も安定して推移している。

公演料収入については、台風や新型コロナウイルスの感染拡大を受けて一部公演が中止となり、当初の見込みより減少しているため、寄附窓口設置の検討・準備を行った。

また「SPACの会」の会費収入も一定の推移を保っているが、令和2年度は劇場の改修工事に伴う閉館のため会員サービスが一部利用できなくなることから、会員数減少対策として新規サービスの検討・準備を行った。

#### ◇改善・機能強化

事業計画、事業実施状況、人事体制等については、芸術総監督、各セクションのチーフの月例ミーティングによってモニタリングの機能を果たしている。経営状況については、引き続き静岡県職員を交えたミーティングを定期的に行うことで、調整・改善を行っている。

課題については、本報告書「2. 自己評価(2)有効性」での解析結果から、専属俳優の所属する演技部、技術スタッフの所属する創作・技術部、制作スタッフの所属する制作部のという、3つのセクションの壁を越えたノウハウの共有・蓄積・継承のシステムに弱点があることが判明した。具体的には、我々が「座組」と呼ぶ、各演目の公演準備～実施期間中における俳優・各セクションのスタッフによるテンポラリーなユニット内での課題共有や克服のためのアクションについては活性化しているが、座組は公演が終了すると即時解散し各メンバーは次の演目の座組に合流するため、振り返りや事後検証の時間が取れず、結果として各座組で得られたノウハウの蓄積は個人レベルにとどまっている。対策として、当該公演の座組に入った各セクションの担当者が、自分の所属に戻ってから獲得したのノウハウを所属内で共有する仕組みづくりが必要である。制作部においては、自己評価ユニットの詳細記述欄がレポートおよび引継書として有効に機能しはじめており、まずは自己評価ユニット解析結果についての、セクションを越えた共有に着手したい。

各方面とのネットワーキングについては、平成31年度より県から受託した「子どもが文化と出会う機会創出事業」によって、県内各地での出張公演およびアウトリーチ活動が可能となり、浜松市や下田市など地理的要因が課題であった自治体・学校・文化施設との連携を深め、新たなネットワークを構築するに至った。